



論文誌の未来から 見えるもの

編集理事 齋藤 洋

10年近く研究のマネジメンツ的工作に従事していたが、2、3年前から、研究者に戻り、論文も再び書き始めた。そして驚いた。論文投稿を取り巻く環境が10年前とは大違いである。以下は、必ずしも1論文誌で実現されているわけではないが、こんなにいろいろできるようになっている。(1)著者最終原稿をもって、採録決定とほぼ同時にオンラインで掲載される。数か月先に、ゲラ校正を経た紙版の最終版が出るのであるが、その時点まで待たされることなく、かつ、最終版が出れば、オンライン版も更新される。(2)オンライン版では、紙版では載せられない付属物が付けられる。動画像、紙版ではページ数制限で載せられない長文の証明や、プログラムのソースコード、実験データまで、付けることが可能である。(3)投稿と同時に、査読結果が出る前から、公開のアーカイブ用サーバへアップするよう勧められることもある。先行性の主張のためである。不採録という恥をかくリスクもあるが、採録まで時間がかかる分野では、利益の方が大きいのであろう。それ以外にも、自論文が引用されるとメールで、その旨、教えてくれる、研究テーマに関連するTシャツを作ってくれる、などというのもあると聞く。ここまで来ると、余計なお世話と思われる方もいるかもしれない。

これらは、紙から電子化されたことで実現された内容ばかりである。本会でも、上記のうちの一部が、実現、あるいは、実現の方向で検討されており、徐々に本格化していくであろう。

さて、これらの学会サービスが進展するとどうなるのであろうか。最大のターゲットは、多言語対応であろう。IEEEExploreでは英語だけであるが、Google Scholarでは多言語での検索が可能である。本会で現在検討中の検索システムでも、多言語対応を視野に入れている。現在の多言語対応の多くは、各言語の枠内での対応であるが、ある言語の検索ワードに対応する、それぞれの言語での検索ワードによる検索が行われるようになり、そして最終的には、任意の言語で論文が読めるようになるのではなかろうか。これは、英語が主力の科学技術領域において、英語を母国語としない人たちに朗報になり得ると同時に、学会のあり方を大きく変える可能性がある。言語と地理的位置という二つのローカルリティが、我が国の多くの学会の基盤になっているからである。現在、本会は、日本国内会員の減少を海外会員の増加で補う(補い切れてはいないが)構造になっている。言語の壁が取り払われたときには、こうした海外会員は、どこに向かうのであろうか。母国の学会か、(通常、米国にある)世界で最大の学会か、本会を選択してくれる理由はあるのか。日本の国内会員はどうか。世界で一つの学会でよいと思うか、あるいは、母国の学会があればよいと思うか。言語という障壁が外れることは、グローバル競争のハンデが一つ減ったということだけではない。グローバル競争がより苛烈に広範囲になるということにほかならない。学会それ自体もより厳しいグローバル競争に巻き込まれていく。

今後の我々を取り巻く環境を考える材料として、経団連の21世紀政策研究所が出した2050年までの世界経済・日本財政シミュレーション(<http://www.21ppi.org/pdf/thesis/120416.pdf>)の概要(p.11)の冒頭の文章を御紹介したい。「人口減少の本格化により、日本経済は2030年代以降恒常的にマイナス成長の恐れ(先進国から脱落)」とある。下り坂の中で、我々自身も、学会も激しいグローバル競争に立ち向かわねばならない。そして、この文章は、次のように続く。「チャンスはある。」